

三聖の言葉

孔子の言葉

釈迦の言葉

老子の言葉



孔子の言葉 (読書の中より)

7月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年7月1日(土)

- (1) 曾子曰く、吾、日に三たび吾が身を省りみる。
人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝うるか(小さな自分でいいのか)
- (2) 子曰く、巧言令色には鮮なし仁
- (3) 学びて時に之を習ふ、亦 説ばしからずや
- (4) 朋、遠方より来たる有り、亦楽しからずや
- (5) 君子は本を務む、道立ちて道生ず(問題の本質を見極める)
- (6) 学べば固ならず(新しいものを取り入れる)
- (7) 過ちては、則ち改むるに憚ること勿れ
- (8) 終りを慎み、遠きを終う(未来へ)
- (9) 事に敏(すぐやる)
- (10) 慶喜公がすでに大政を奉還されたからには、義を守り政治に関係すまいと決心した(渋沢)
- (11) 大隈重信だけは私と同じやり方で、来るものは拒まず、誰にでも気やすく会って面談しているが、その他には門戸開放主義の方はあまりいないようだ(渋沢)
- (12) 西郷には常々他人の利益をはかってやろうという親切心があった(渋沢)
- (13) 過去に執着しない、死んだ子の年を数えない(渋沢)
- (14) 学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し(学ぶと考える)
- (15) 之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す(知識の棚卸)
- (16) 義を見て為さざるは、勇無きなり
- (17) 人の己を知らざることを患えず、己の人を知らざることを患う
- (18) 親しんでも狎れるな、周しみて比らず、人間には風度が大切だ
- (19) 知っていることは知っていると言ひ、知らないことは知らないと言う
- (20) 酒は量なく、ただ乱におよばず
- (21) 角が必要、あまり円いと転びやすい
- (22) 正しいことをするには他に屈してはならない、時期の到来を待て
- (23) 秀吉は晩年において礼の本質を忘れた
- (24) 君子は言に訥にして、而して行ないに敏ならんことを欲す
- (25) 自らできないことをしゃべりたてるな、ほらを吹いてはいけない
- (26) 岩倉具視は、策略はあったが、決して口先だけの人ではない
- (27) 儒教は支配者に都合のよい差別思想とも言える、しかし孔子はそんなレベルを気にしていない

- (28) お父さんが偉く、皇帝が最も偉いという国の支配者にとっては理想的な宗教である。それを孔子は世の幸せと考えているのだ
- (29) 儒教は先祖崇拝をベースにした差別的な思想、それが全体の幸せ
- (30) 儒教は皇帝のための宗教であるとは結果論である
- (31) 朝に道を開けば夕に死すとも可なり、永遠は現在の一瞬にある
- (32) 利に放りて行えば怨み多し
- (33) 子曰、賢を見ては斉しからんことを思い、不賢を見ては内に自ら省みる
- (34) 子曰、徳は孤ならず必ず隣あり
- (35) 孟之反、その馬に鞭打って曰わく、後れたるに非ず、馬進まざるなり
- (36) チャールズ・ダーウィンは、人間と動物の長い歴史を見ると、お互いに助け合う方法を体得したものが繁栄してきたと言っている
- (37) アル・カポネとミルト・ヒルトン
- (38) 回や其の心三月仁に違わず、その余は則ち日月に至るのみ
- (39) 子貢(貨殖、魯、衛の宰相)、子路(勇敢)、子夏(魏の文公の師)
- (40) 礼の教えを強調ほど、音楽(心)をやる(礼は形式に流れやすい)
- (41) 君子は義に喻り、小人は利に喻る
- (42) 君子は和して同せず、小人は同じて和せず
- (43) 君子はこれを己に求め、小人はこれを人に求む
- (44) 君子の過は日月の食、小人の過ちは必ず文る
- (45) 君子は行ないで示し、小人は舌でいう

参考：(司馬遷史記 徳間書店)、(孔子 論語)、
(孔子、渋沢栄一著 ディスカヴァ EBOOK 選書)、
(男の論語 童門冬二著 PHP 文庫)、
(超訳論語 許成準 彩図社)、
(一番わかりやすい現代語訳論語 下村湖人外 古典教養文庫)、
(孔子・老子・釈迦「三聖会談」諸橋轍次 講談社)



釈迦の言葉 (読書の中より)

7月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2023年7月11日(火)

- (1) 釈迦は生きている人間がどうすれば悩み、苦しみから解放されるかを解き、死後の世界や「あの世」について語ったことはない。死後の世界について問われたとき、「毒の塗った矢が飛んできて身体に突き刺さったとする。その時この矢はどこから飛んできたのだろう、この毒の種類は何だろうか?などと考える前にまずやることがある。それは、すぐに矢を抜くことである」。これが有名な「毒矢のたとえ」、あの世があるか無いかを考えるのは時間のムダと言っている。
- (2) 自己を灯明とし、自己を抛り所として、他のものを抛り所とするなかれ
- (3) 僧は葬式のような儀式に関わってはいけない。修業に専念しなさい
- (4) 釈迦は生きている人間の苦しみからの解放を説いた。あの世を認めていない
- (5) あの世があるかないか、霊があるかないかを考えるのは時間のムダ
- (6) 大事なのはこの世の苦しみを解決することであり、そのために修業をしなさい。釈迦の教えは自助努力である
- (7) 宗教は生きている人間のためにある、人間は死んだらただの物質である
- (8) お葬式は本来仏教で行う儀式ではない
- (9) 全ての物事は本来空である。全ての物事は常に変化する
- (10) 目の前の物事の生・住・異・滅に心を迷わされてはいけない
- (11) この世のあらゆる物事のありようは、一切が手筈で、しかも大きな調和を保っている
- (12) 釈迦の教えは、念仏を称えれば救われるといったような、救いを求める宗教ではない
- (13) そうした変化の様子を見通すだけでなく、その善悪を知らねばならない
- (14) 生・住・異・滅と世の中のことは一刻も止まってははいない
- (15) 現在、宇宙はその始まり(137億年前)の間近まで見ることができる。ハッブル宇宙望遠鏡で、131億年前、宇宙が生まれて間もない姿を観測することができる。釈迦は独自の方法でそれを見ていたかもしれない
- (16) 人間も、すべての動物も植物も、いつかは、必ず滅びる
- (17) 仏教は神について説かなかったほぼ唯一の宗教である
- (18) 釈迦とその教団はカーストを認めなかった
- (19) 釈迦一神はいない
- (20) 大乘仏教一如来という神の概念、薬師如来、大日如来

- (21) 何かに頼って生きることを否定する
- (22) 「ないものねだり」をせずに、「いま・ここ」をしっかりと生きる
- (23) 釈迦は差別を徹底的に否定した
- (24) 釈迦はアートマン(魂、自我)を否定することで、輪廻転生がないことを説いた
- (25) 共命鳥の失敗
- (26) 感情のゴミを捨てる、根本からごっそり捨てる
- (27) 抽象度を上げる、大きく物を見る
- (28) 「嬉しい」、「楽しい」、「幸せ」という気分ではなく、ゴールを目指す
- (29) 科学と対応させて考えることのできるのは釈迦時代の仏教である
- (30) 2500 年前にインドで興った仏教は様々な形をとって世界へ流入していた
- (31) 私の指先(仏教典)を見るな、指の指しているところを見なさい
- (32) 「苦」とは人間の一時的な細胞レベルの欲求で、それは「煩惱」である
- (33) 相関を見抜く英知
- (34) 下を向けば暗くなり、上を見れば明るくなる
- (35) ネパールのルンビニは釈迦が生まれたところだから税金は 6 分の 1 にする(アショーカ王)
- (36) 釈迦の仏教(2500 年前)、部派仏教(2300 年前)、大乘仏教(2000 年前)

参考：(法華経、無量義経)、
(お釈迦さまの脳科学 苦米地英人 アマゾン)、
(ブッダの言葉 中村元訳 岩波文庫)、
(生き方、ちょっと変えてみよう ひろさちや アマゾン)、
(科学するブッダ 佐々木閑 角川ソフィア文庫)



老子の言葉 (読書の中より)

7月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年7月21日(金)

- (1) 道は道であるべし。その道は通常言われているような道ではない(道経)
- (2) 科学の最後のフロンティアは何か、それは人間の脳です
- (3) 人間の脳は心とひとつのものである。死んで脳がなくなれば、すべては消滅する
- (4) 心はパソコンで言えば、ハードディスクに電流が流れたに過ぎない
- (5) 釈迦は2500年前に、自分の脳と瞑想のみによって、量子論によって導き出された結論を語っていた。見えないものを理論で研究する科学者と同じ仕事をしていた
- (6) 故に、常に無欲であれ、真実が見える。欲あれば自己の求めることに偏す
- (7) 天は長く地は久し。進んで敢えて、前とならず(道教)
- (8) 上善は水の如し。水は善く万物を利して争わず(道教、孫子)
- (9) 五色は人の目を盲ならしむ。五味は人の口を爽わしむ(道経)
- (10) 鳥が飛び、魚が泳ぎ、獣が走ることは、私も知っている。走るものは網で捕え、泳ぐものは糸で釣り、飛ぶものは矢で射ることもできる。しかし、龍となると、風雲に乗って天に昇るというがまるで手に負えない。今日、老子に逢ったが、龍さながらで、全く正体がつかめなかった(史記老子列伝)
- (11) 賢人を重用とせよ、そうすれば民は争わなくなる。多言はしばしば窮す、空を守るにしかず(道経)
- (12) 命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は(からっぽ)、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬ(西郷南洲遺訓)
- (13) 学を為すには日に益し、道を為すには日に損す
- (14) 老子は現世離脱型の志向、孔子は現世密着型の志向
- (15) 老子の生きた時代は中国戦国末期、歴史の大変動期であった
- (16) 武帝の皇太后は儒家を認めない道家の信者だった
- (17) その実をとって花をとらない。だから彼を捨てて、此をとるのである
- (18) 老子のキャッチフレーズは、「道」、「徳」、「一」、「大」である
- (19) 上徳は自らを不徳とする。それゆえに有徳である
- (20) 徳がなくなると仁が要り、仁がなくなると義理が要り、義理がなくなると「礼」が要る。「礼」を捨てれば「文化」、「自由」が生まれる
- (21) 故に道を失いて面して後に徳あり、徳を失いて面して後に仁あり、仁を失いて面して後に義あり、義を失いて後に礼あり

- (22) 本当の力は空白である。不満を持たない、欲を出さない
- (23) 言ったもん勝ちは老子の精神ではない
- (24) 他人に勝つより自分に勝つ
- (25) 玄妙なものこそは神秘的なもののすべての間である
- (26) 釈迦は、霊魂や死後の世界については語っていません
- (27) オカルトはビジネス、霊やあの世があると振る舞むのもビジネス
- (28) 時代が悪くなると法律が多くなる
- (29) 人生万事塞翁が馬
- (30) ござかしい知恵・作り出した考え・つまらぬ疑を持つな
- (31) 道教は「道」の教えであり、宇宙の根源のことであり、バラモン教で言うブラフマン(神)のことである
- (32) 道行の修業は「タオ」と一体となるための修業である
- (33) 道教は、民衆の間で信仰されていた中国の迷信の寄せ集めである
- (34) 善と悪と相去ること何若ぞ
- (35) 老子は儒家の言う礼の形式や偽善性を批判している
- (36) 老子のいう道とはそこから天地万物が生成してくる宇宙の根源である
- (37) 物は壮んなれば則ち衰ゆ
- (38) 吾が言は甚だ知り易く、甚だ行い難きも、天下能く知る者なく、能く行うものなし
- (39) 火を起こすフィゴの中で、一番大切なものはガランドウの部分だ
- (40) 孔子が居たからこそ老子が居たのではないか、時代は孔子が先
- (41) 五色は人の目をして盲せしむ、五味は人の口をして爽わしむ
- (42) 谷は低い水も流れこむ、谷神は死せずこれを玄牝という
- (43) 水は方円の器にしたがう、水はよく万物を利してしかも争わず
- (44) 自然はつねに反復、栄えるものは衰え、衰えたものは栄える
- (45) 君子は名に殉ず、小人は財に殉ず
- (46) 心に私なき時は疑ふことなし (上杉謙信)
- (47) 仏神は尊し、仏神をたのみず (宮本武蔵)
- (48) 我、人に勝つ道はしらず、我に勝つ道を知りたり (柳生宗矩)

参考：(司馬遷史記 徳間書店)、
(老子の読み方 渡部昇一、谷沢永一著 PHP 研究所)、
(老荘思想がよくわかる本 金谷治 アマゾン)、
(トルストイにより「老子道徳経」は、壮大な詩に生まれ変わった。吉橋素男 アマゾン)、
(男の老子 童門冬二 アマゾン)、
(孔子・老子・釈迦「三聖会談」諸橋轍次 講談社)